

原宗子著 『古代中国の開発と環境―『管子』地員篇研究―』

横山, 裕
九州大学

<https://doi.org/10.15017/18163>

出版情報：中国哲学論集. 22, pp.71-81, 1996-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：



『管子』の研究は馬王堆漢墓より出土した「道法」資料との関係から日中で近年盛んに行われてきた。その成果が中国では纏まった研究書として相次いで出版されるのとは対照的に、日本では一九八七年に金谷治氏の『管子の研究』（岩波書店）の一冊が出版されたのみである。（『管子』研究の文献については、谷中信一氏『日本中国『管子』関係論文文献総目索引』一九八九年 早稲田大学出版部を参照。）それは『管子の研究』の完成度の高さ故にそれに次ぐ書がなかなか出にくい状況であったからでもある。そのような状況の下、『管子の研究』とはまったく違う研究視座を持って登場したのが本書である。『管子の研究』が『管子』をマクロに捉えて全体像を浮かび上がらせたのに対して、本書はミクロから『管子』の全体像に迫っている。副題にあるように『管子』中の地員篇に注目し、その詳細な研究を通じて『管子』の統一原理を探ろうとしている。全篇にわたっての考察は緻密さを極めており内容の要約は容易ではないが、評者なりの理解によって、ミクロから『管子』に迫った本書を紹介したい。先ず、本書の目次を掲げておく。

『管子』地員篇研究

横 山 裕

はじめに

『管子』の研究は馬王堆漢墓より出土した「道法」資料との関係から日中で近年盛んに行われてきた。その成果が中国では纏まった研究書として相次いで出版されるのとは対照的に、日本では一九八七年に金谷治氏の『管子の研究』（岩波書店）の一冊が出版されたのみである。（『管子』研究の文献については、谷中信一氏『日本中国『管子』関係論文文献総目索引』一九八九年 早稲田大学出版部を参照。）それは『管子の研究』の完成度の高さ故にそれに次ぐ書がなかなか出にくい状況であったからでもある。そのような状況の下、『管子の研究』とはまったく違う研究視座を持って登場したのが本書である。『管子の研究』が『管子』をマクロに捉えて全体像を浮かび上がらせたのに対して、本書はミクロから『管子』の全体像に迫っている。副題にあるように『管子』中の地員篇に注目し、その詳細な研究を通じて『管子』の統一原理を探ろうとしている。全篇にわたっての考察は緻密さを極めており内容の要約は容易ではないが、評者なりの理解によって、ミクロから『管子』に迫った本書を紹介したい。先ず、本書の目次を掲げておく。

序章 『管子』研究の現状と課題

- 一 『管子』研究の出発点
- 二 いわゆる管子四篇の研究現状
- 三 『管子集校』の功罪
- 四 『管子』研究の当面の課題

第一章 土壤序列と五声配置

- 一 地員篇の研究現状
- 二 五声付記の意味
- 三 地下水位と適作種
- 四 高地下水位五種の土壤実態
- 五 土壤序列の示す自然改造志向

第二章 樹木の選択に見る開発の視座

- 一 土壤と樹木の二つの関係
- 二 「山」に生える樹
- 三 開発地での選択樹種
- 四 「三土」の樹木
- 五 『管子』全書の樹木観
- 六 樹木と「国」策

第三章 『草』の実態と意義

- 一 「草」と地下水位
- 二 「藎」と「萑」の位置
- 三 「蕭」とはヨモギか
- 四 二種の水草
- 五 「山」にある草
- 六 「雜草」という概念
- 七 「羣菜」の実態と記述法
- 八 「五臭」の記述
- 九 非粮食草類の栽培
- 十 『管子』全書の「草」への視角

第四章 種えつけるもの—粮食

- 一 問題の所在
- 二 「秀」無き「粮食」
- 三 特徴ある茎葉
- 四 「秀」を持つ「粮食」
- 五 「三土」の「種」
- 六 『管子』中の粮食作物

第五章 麻をめぐる

- 一 地員篇における麻の存在

二 紡織は「女事」か

三 『商君書』の衣料生産観

四 『墨子』の衣料生産観

五 『孟子』の衣料生産観

六 『管子』全書の衣料生産観

七 麻生産と絹生産の労働形態

第六章 「九州之土」の実態

一 「九州」とはどこか

二 五粟・五穀・五鳧

三 五沃・五恐・の「恐」字

四 五沃・五剽の「剽」と「芬」

五 沃の「斥」と五浮・五殖の「斥」

六 五位・五藤・五壤と腐植

七 地員篇の評価基準

第七章 「ヤマ」と丘陵地帯

一 問題の所在

二 墳延と陝・陵・山

三 「得べからざる」地下水

四 土質・産物による命名か

五 地質・山容による命名か

六 どこで井戸を掘ったか

七 牧畜・鉞山と山東

終章 地員篇が示す『管子』の本質

一 地員篇の叙述対象地域

二 地宜と産業構造

三 地員篇の筆法

四 「差異」の必要性

五 『管子』の成立

あとがき

索引

以下、各章の内容を紹介し、著者の研究の特徴を明らかにしてみたい。

二

序章では著者がなぜ地員篇を取り上げるかという理由を過去の『管子』研究の問題点との関連から明らかにしている。

『管子』を歴史学の史料として扱うことは胡適の『中国哲学史大綱』（一九一九年）に始まり、扱い方は以下の三つに分類できるとする。①全書に通貫する思想のない寄せ集めの偽書。②その偽書の材料となった著述が成立した時代を確定すれば、その時代を表示する史料として用いうる資料集。③自己の所論を展開するために必要な文辞を、適宜切り取って利用できる素材。現在の研究はこの分類の枠内で進められており、あくまで『管子』＝偽書＝無秩序な寄せ集めとして認識されるが、このような認識の下、『管子』の書から切り離された文辞を史料として研究しても、古代の実像はみることができないと指摘する。また著者は、所謂『管子』四篇の研究においてもこの状況は変わっていないとし、中国においては『管子』を「道家」「法家」「黄老派」いずれかの文献であるとの性格規定が先にあって、その規定に合致する文辞のみを取り上げるというものであり、胡適の分類の域をでないと指摘する。日本においては『管子』の書誌学的取扱いに注意は払われているが、それが逆に恣意的に『管子』を利用することを許容する結果を招いているとする。このような状況の中で現存の『管子』の内在的な成立原理を本格的に追求した研究として町田三郎氏の研究を挙げるが、ただ、町田氏の提出した『管子』独自の座位は道家の崩壊によって成立する事を前提としていることについて、「道家」を言うことは『漢書』芸文志の分類に依拠することになることを言い、やはり問題が残るとする。『管子』研究において『管子』の文辞の恣意的な利用の他、恣意的な解釈を可能にした原因として『管子集校』（一九五六年）の存在を指摘する。それは、『管子集校』はこれまでの『管子』の注釈が整理されており便利であるが、研究者が字義校訂の結果のみを恣意的に利用しては『管子』の実像は得られないからである。著者は『管子』の実像は以下の三つの方法で得られると考える。第一に、現存の『管子』の諸注の整備、第二に、唐宋時代の他書に引かれた『管子』の文辞の整備、第三に、『管子』中の一篇を取り上げ、その篇と他篇との距離・関連性を探る。それで、本書は第三の方法により現行『管子』に忠実に研究を進めるため『管子』において自然科学的追求が可能な地員篇を研究対象とするのである。

第一章は先ず四部叢刊本に依った地員篇全文をあげ、A～Zの各条に分類している。そして地員篇が「土」の呼称を述べた篇であることを確認した後、大まかに、地下水位別に土壤を分類する叙述形式を持つこと、自然植生を指標とした土地の高低・水土条件を示した記述、土壤の理科学的性質を中心に「畜殖果木」の生産性順に土壤を配したも

のに区分できるとしている。以下、考証はこの分類をもとに行われる。

従来の研究では地員篇の前半、特に冒頭部の五声の音質とその音程の算法を述べる文については地員篇と関わりがない篇とされることが多いが、地員篇全体の構造を解明するためにはこの部分の意味を明らかにしなければならず、現在の「常識」で文辞を訂正することは慎むべきであるとする。そして、地員篇冒頭部の五声が、通例のものではなく特異な算出法を用いてあり、律書等では中位音を示す角を最高音とし高音を示すはずの徵羽が低音となる音階を形成し、その音階に従って高音から順に配されたものであること、その特殊な音階が地員篇に記される適性作物及び「泉」に至る深さに関連すること、さらに地員篇に記される瀆田、赤墟、黄唐、斥埴、黒埴の土壤と関連することを明らかにしている。以上の考察を踏まえて、元來生産力の低い土地を生産力の高い土地へと転換する経緯と、そこに表出される自然に働きかける人間の意志と知力との発揚が地員篇の第一の目的であつたことを導きだし、土地は政治力の介入によって改良されうること、本来備わっている自然のままの生産力の順序が変更可能であることを顕在化するために、本来の順序とは異なつて音階の転換された五声を付したとこの章に結論づけている。

第二章では地員篇冒頭の土壤の配列が自然改造の農業生産力に対して持つ意義を宣伝し、読者の土壤認識を深めるものであつたことを踏まえ、地員篇の後半部分ではその役割は樹木にあることに着目して樹木と土壤との関係について考察する。

まず、地員篇では樹木の名は第一章で分類したなかで前半部十条、後半部三条の計一三条に有り、前半部の十条も「宜」の字で導かれる人為的に植樹されて生育が期待できる適性樹種と、「宜」の字で導かれない自然植生とに分けられると指摘する。そして、自然植生はそこに記載される樹木名を見ることによってその土壤の地下水位を予想せうるものであり、適性樹種に記載される樹木はすべて人間の生活活動にとつて甚だ有用な樹種であるが故に、食料生産のみを志向して耕地開発を進めた場合、自然植生は失われ工業に必要なエネルギーを得るための樹木は減少し結果的に人間の生活も存続し得なくなることを行い、したがって、時代とともに伐採可能な樹木とそのまま残すべき樹木とを分別することの必要性が増加し、地員篇前半部の十条の記述は人為と自然とのバランスをはかりつつ開発を試みんとしたことを明示したものであるとの見解を示している。次に、後半部に樹木名をあげる三条は適性樹種と自然植

生との要素が並存していて、それは三条にあげられる土壤分布地域に生活する人間の衣食住すべてをまかないうるに必要な樹種の組み合わせが示されていると指摘し、そこにも多様な産業を並存させることで自然と人為とのバランスを図ろうとする地員篇の志向が見て取れると言う。そして、この地員篇の志向は『管子』全体の樹木観となっていることを述べている。（ここで著者は『管子』全体で言及される樹木についての約七十カ所にわたる記述をあげ、七つに分類している）『管子』の樹木観からみれば、『管子』は穀物を食料としない生活形態の人間も内包する社会を統治する君主を想定しており、その範囲で君主の富強化を目していた典籍であると述べている。

第三章では草を考察の対象とし、地員篇の現れる草に対する認識が『管子』全体に共通し、草地に相応の経済的価値を認めていたことを明らかにしている。

地員篇には樹木同様に、「宜」の字のもと各土壤名ごとに多くの草の名が挙がっており、また前半部末尾には生育地区の高低順に十二種の草が列記されることを述べた上で、各草を詳しく考察すると地員篇に記された草類全体の叙述図が明らかにできると指摘し、前半部分の草は地下水位別の適性植物を記し、耕地化が企てられた地については、色々な穀物を補う植物としてその保護を奨励し、山地においてはその地の地下水位を推定するための指標植物を序列していることを明らかにしている。そして、この序列により灌排水による耕地製造の難易度をあらかじめ予測しようという意図があったと言う。地員篇後半部分には「五粟」「五沃」「五位」の三つの土地別に草類の記述があつて、「五位」とは樹木と桑草が自生しそれを採集しやすい土地、「五粟」とは肥沃な耕作土壤、「五沃」とは森林土壤から耕作土壤への移行課程にある土地であつて、これらの土壤の記述でも土壤ごとの草類の差異、有用性、利用範囲等が詳細にのべられ、『管子』全体における草類の認識と共通することを指摘する。『管子』全体では五十五条にわたつて草類は記述され、それらは、一般的に自然の構成要素として草類をとらえる視角、補助食料・日用品材料としての、その採集・利用に着目するもの、牧畜業の生産条件とみなすもの、燃料として捉えるもの、交易・貢納など、草類の交換機能に注目しているもの、農業生産に対する阻害要因と規定しているもの、の六つに分類可能であるとする。また、『管子』が他の典籍と異なる点として、草を農業生産に対する阻害要因とする記述の少ないことを挙げ、これは『管子』が草地を土地類型の一つとして認識し、相応の経済性を認めていたからに他ならず、草類に対して相応の価

値を認め、農耕以外の経済性を認識する姿勢は地員篇のそれと共通するものであることを明らかにしている。

第四章では、現に植え付けられている食物の考察を通じて『管子』の開発の一面を明らかにしている。

地員篇後半に見える「其種」で記される草木類は前半で述べられた開発された土地ではなく、開発の行われていない地に天水農業によって植え付けられたものであると述べている。記述に「秀」の字を含むものは従来の研究ではイネ科特有の穂だとされてきたが、地員篇の文辞からはそれ以外の例えばひょうたんの長くぶら下がる実や山芋の花穂も「秀」に包括でき、高カローリーの主要糧食とみなしうることを言った上で、地員篇に記される糧食作物の種類と序列とが、地員篇の成立地と山東半島との関連性を示していると指摘する。『管子』全体と地員篇の関係については、地員篇が糧食を網羅するのに対して地員篇を除いた『管子』では「稲」への言及がなく、それは「稲」は地員篇では当時、利用価値の低い土地の産物として認識されており、したがって『管子』全体では言及がなされなかったからであるとする。『管子』の糧食作物に関する記述についての特徴として、和戦の如何に関わらず、民族の交流によって糧食作物の相互伝搬があることを是認する立場を取っていることであることを挙げ、そこで、『管子』では土地の改造ではない栽培品種の移動、選択といった開発も視点にいれていたことがわかると述べている。

第五章では、食料ではなく衣料品生産という視点で地員篇の植物を考察している。ただ、この章のみ地員篇から十分なデータが得られないという理由で、考察方法が『管子』全体から始められ、その結果を地員篇に演繹するという研究方法が採られている。

地員篇においては「麻」は繊維材料と見なされ「絲」「布」への言及は多く見られるが、「桑」の言及はあっても「絹」の言及はないことを指摘し、このことが『管子』全体の衣料品生産観と深く関わっているという認識を示した上で、そこで著者は、『管子』のそれと比較対照するために、『商君書』『墨子』『孟子』それぞれの衣料品生産観を考察する。筆者の考察によると、『商君書』は国家財政の基盤を穀作に置き、女子を男子同様に農戦に従事する存在として捉え、衣料品生産を家庭内分業による女子固有の労働とは見なししておらず、『墨子』ではやはり男子が衣料品生産者としては考えられてはいない。ただ、婚姻による家の必然性を認めない『墨子』では、戦国期に属すべき宮廷を失った織物工の女子集団が自立のため衣料品を生産したとされ、『孟子』でも男子は衣料品生産者としては記さ

れていないことを言う。『孟子』の背景には社会的・経済的原因によって結婚できない相当数の男女の存在があつて、したがつて『孟子』は貧困で結婚できない農業に従事する男子に衣料品生産技術を持つ独り身の「土」の女性が嫁げばいいという構想を描いたとの見解を示している。以上の三書と比しても『管子』は「女」と「衣料」に言及する記述が圧倒的に多いことを指摘し、また、衣料品生産を国家財政の増収要因として積極的に捉えているのが特筆されると言う。このことから考えて、『管子』の衣料品生産観は、衣料の生産が、農業の副業的に女子によって行われ家族消費が主であるといった発想とはおおきく乖離していると述べ、『管子』における衣料生産は農業と質的に同等な富国化のための一産業として認識されることを言い、それは『管子』では統治のために産業を農業に統一しようと思せず諸業の並存を認め、その全てから国益を得ようとしていたからであるとする。この観点から、自然生育が可能な「桑」によつて生産される「絹」よりも、生産適地の少ない「麻」が栽培可能な土地を記述することに地員篇は意義を見いだしていたとの見解を示し、その理由として「麻」の特産地は領域国家の産業構造に重要なポイントをしめることになることを挙げている。

第六章では、地員篇後半の「九州の土」に記された一八種類の土壤について詳細に実体を考察し、それを現代土壌学的観点から整理している。

中国の古典中、土壤についての言及は『尚書』禹貢と『周礼』草人が有名と挙げた上で、地員篇の土壤の種類が圧倒的に多いだけでなく、『尚書』『周礼』が穀物生産量を土壌評価の基準にしているのに対して、地員篇は生産性で評価は行われることを指摘する。その理由として、所謂農業の範囲だけでなく経済作物、及び内陸漁労の生産性も土壤の影響下にあるという認識があつて、それらを包括して評価がなされていることを指摘している。そして糧食作物しか生産できない土地よりも多様な産品が生産可能な土地をより評価するという自然観・経済観こそ地員篇が他の典籍と比して異なるポイントであると述べている。しかしながら、地員篇の成立した時代は様々な産業を主要経済の中心と認識せず、集約的・合理的農業こそが国家安定の中核であるとする政治思想が隆盛であり、その思想のもと富国強兵が可能になると考えられており、そういった時代の要請に鑑みると地員篇の土壤分類が後に訓古学の対象となるのみであつた運命をたどつたのは不可避であつたとの見解を示している。

第七章では、具体的考察材料に乏しく第六章まで保留してあった地員篇のR条を前章までの考察結果を踏まえて解明している。

R条は地員篇の他の部分と異なり、土壌的性質を伺わせる記述がなく土地の呼称と地下水位のみの記述しかないことを示した上で、地員篇の地下水位の記述に関する特徴を、土壌の海拔の高低に対応せず、海拔以外の土質や植生によって意外な地下水の存在を予想できること及び地下水位の人為的制御の可能性に言及することにあるとする。これによって、「墳延」から「高陵」まで一五条に分類されるR条の記述については、前半の六条が地形的特徴によって標高差に関わりなく生じる特殊な地下水位を示し、後半の八条が山麓地帯について、その山容の特徴によって知りうる山麓の地下水位を示したものであると述べている。また、地員篇の編者はR条を記述する際、事物の多様な情報をできる限り付加できる文字を使用し、既成の文字がなければ、記号や略図で書き留めた可能性もあることを指摘している。R条の中には使用不可能な地下水に関する記述があるが、これは鉱業の存在を視野に入れて重金属による被害をさけるためであったとし、牧畜業との関連の可能性についても言及している。これらのことから筆者は、R条は従来為政者によって直接的支配の対象として認識されなかった耕地以外の鉱区や牧畜区に支配者の関心が向き始めたことを示す一つの証拠であるとするとする。

終章では、先ず、第一章から第七章までの考察をふまえ、地員篇の全文訳を掲げている。

地員篇の樹木は落葉広葉樹が多く、このことから全体的割合として針葉樹・常緑広葉樹が多い中国全土ではなく、諸条件も加味して考えると地員篇の対象地域は山東半島、すなわち斉の記述であるとする。地員篇には各種産業の存在とその振興が記され、これを『管子』全体に共通する特徴と考えている。また、地員篇では多角的産業を構想しているも前半部と後半部では産業構造の地理的配置に差異が見えることも指摘している。それは、前半部は各区相互の流通を為政者側で統制することを志向し、後半部は小地域内で資源循環型の複合産業を構想しているという差異である。そしてこの差異は実は『管子』全体にある産業構造の志向と合致するものであるという見解を明らかにしている。地員篇の記述は極めて具体的かつ自然科学的合理性に裏付けられており、それは現実への対応策を考えるに当たってより有効なデータベースとなりうることを目的としていたことを意味すると考える。では現実への対応とはなに

かということであるが、筆者はそれは地員篇の文辞上には地員篇の編まれた意図は表出されることはないとしながらも、『管子』全体の共通認識を通してみれば、その意図するところははっきりと理解できると言う。そして、その共通認識、換言すれば『管子』全篇の書かれた目的とは、「夷狄」の征服しかも軍事行動によってではなく経済的交流によってなし崩し的にお互いが意識するに至らないうちに行われるような征服を行うことであつたとする。そして地員篇の前半部、後半部で記述が異なる理由及び『管子』全体で異なる産業構造への志向が記載される理由を、すでに併合した地域に関する記述とこれから支配下におこうとする地域の二つの記述があつたからであるとする。以上から、『管子』全体を貫通する統一原理とは、斉と異なる生活様式をもつ人々を経済的戦略でいかに支配するかという政治的課題に対する解答の追求であつたと結論づけている。そして筆者は、戦国時代が終わり現実的実効性を失つて後、即ち斉滅亡の後には『管子』は学術の書となり果てたのであるが、そのことによって漢初の黄老学派の誕生を促すことになつたとの見解を示している。

三

以上が本書の概要である。次に本書の特色について簡単に触れてみたい。

本書の最大の特徴は『管子』の思想を自然科学的アプローチによって考察したことである。『管子』に限らず従来の思想研究が典籍や史料にかかれた思想的内容を抽出して整理し体系づけるいわば形而上の舞台で行われるものであつたのに対して、著者の研究は、一切の恣意性を排除するという原則のもと、資料の掲載にも妥協を許さずデーターを明確に示しながら客観的分析を積み重ねたうえで、思想を導き出している。形而下の対象にのみ徹底して考察を加え、最後にそれを見事なまでに融合し一気に形而上に昇華させ結論を導き出す本書は、読者に上質な推理小説を読んだかの如き読後感を抱かせてくれる。また、第一章から第七章までの形而下の対象に対して行われる緻密で詳細な考察に著者の自然科学、特に地質学、植物学、農学に対する知識にはひたすら驚かされる。客観性の追求を標榜する著者においては当然のことかもしれないが、学問における境界線に変革期がきているということに気づきながらも人文科学

という一分野にどっぷりと浸かっている者に対して啓発する意も込められているように思える。

ただ、評者が気になった点も一、二点ある。著者が序章で述べたように、地員篇を『管子』全体の思想解明の出発点としたのは植物・土地の記述のみという篇として特異な性質を持ち自然科学的な追求が可能であったからに他ならない。それで先ず章ごとのテーマに沿った地員篇の考察がありそれで導き出された命題をもとに『管子』全体との共通性を考察する手法が取られるわけであるが、第五章だけは先に『管子』全書の考察があり、そこから地員篇にフィードバックして地員篇を見ている。ミクロからマクロを補足しようとした時にミクロの根拠がマクロであつては論理的に矛盾するように評者には思われる。もう一点は、著者自身気づいておられることであろうが、本書で得られた「『管子』全書の統一原理は経済的戦略による夷狄征服」という結論は現段階では推定事実の域をでないということである。本書はいわば『管子』のDNAを地員篇から抽出したものである。したがって、この結論が『管子』の他篇からも等しく導き出せるのか、或いは等しく他篇に演繹できるのかといった次の手続きが不可欠であろう。著者の引き続いての研究に期待したい。

本書の結論は実は「なぜ『管子』が書かれたか？」という、これまで誰も言及しなかった疑問に対する明確な解答になつてゐる。『管子』の思想内容の解明のみに固執して根本的な疑問を見過ごしていた評者にとっては読後、蒙を啓かれた思いがした。評者の理解力の欠如の為、本書の的確な紹介及び評価ができなかったことに、著者の御寛恕を冀う次第である。

（一九九四年九月二二日 研文出版発行）
総ページ数四四三 定価一二、〇〇〇円